

原文

保元の乱について誤解するおそれのある表現である。

保元・平治の乱

白河・鳥羽院政が半世紀をこえたころ、天皇家や摂関家の内部で皇

位や荘園の相続をめぐって対立がおこった。天皇家では鳥羽法皇と崇徳上皇すよくが対立し、摂関家では関白藤原忠通ただきよと左大臣藤原頼長よりながが対立した。後白河天皇しらかわが即位すると、鳥羽・後白河・忠通対崇徳・頼長という対立関係が生まれ、中央政界を二分するほどになった。そして1156（保元元）年に鳥羽法皇が亡くなると、崇徳上皇は源為義みなもと・源為朝たけとも・平忠正ただまさらの武士を味方にして天皇を討とうとしたが、源義朝よしもと・平清盛よしみちら天皇側の攻撃にあって敗退した（保元の乱）。

修正文

保元・平治の乱

12世紀なかば、天皇家や摂関家の内部で皇位や「氏の長者うじちやうじや」の地位をめぐる

対立がおこった。天皇家では鳥羽法皇と崇徳上皇すよくが、摂関家では関白藤原忠通ふじわらのただきよと左大臣藤原頼長よりなががそれぞれ対立したが、やがて、後白河天皇しらかわと崇徳上皇の不和に忠通・頼長の兄弟争いが結びついて、中央政界を二分するはげしい争いとなっていくた。そして、1156（保元元）年に鳥羽法皇が亡くなると、崇徳上皇は源為義みなもとのためよし・源為朝たけとも・平忠正ただまさらの武士を味方にして天皇を討とうとしたが、源義朝よしもと・平清盛よしみちら後白河天皇側の攻撃にあって敗退した（保元の乱）。